

歴史のくずかじ

あなたは何者だろうか。

私立昭英女子中・高等学校、ルネサンス文化研究部、昭和三十八年度卒業エッセイ集。いつたい誰が、こんなものを手に取るのだろうか。なにかの研究者。よほどの暇人。私の貧しい想像力で思いつくのはこれくらいだ。

それとも、あなたが読んでいるのは、コピーかもしれない。

もしかしてあなたは、西暦三〇〇〇年生まれのパラグアイ系アンドロメダ人で、この文章はグラアニー語に翻訳されているのかもしれない。暇潰しに読むものが欲しくて、誰も読んだことのなさそうな文章を注文したら、これが出てきたのかもしれない。

こんな空想をするのは滑稽だろうか。けれど今、私の手元には、『バーヒル』の日本語訳がある。ル文研会報、昭和二十七年第二号四十一ページ、樋川幸子訳。

『バーヒル』は、十二世紀の末に、ヘブライ語で書かれた。十五世紀後半、ラテン語へと翻訳された。二十世紀半ばに、ラテン語から日本語へと翻訳された。二十一世紀初頭の現在、私の手元にあるのはこの日本語版だ。

『バーヒル』の作者は、自分の書いたものが、八百年後の日本で読まれるなどは夢にも思わなかったはずだ。彼は、日本という国のことなど、知るよしもなかった。

この文章も、私が夢にも思わないほど遠くまでゆくのかもかもしれない。

私は何者だろうか。

この文章に登場する名前は、すべて仮名である。私の名前、川上忍も例外ではない。

私は、嘘を書くために仮名を選んだ。これから私が書くことは、第三者による客観的な検証に耐えない。私は意図的に嘘を書くこともあるだろう。意図せずに嘘を書くことはもっと多いだろう。

事実と重なるように見える部分があったとしても、偶然の一致にすぎない。すべてが嘘、たわごと、捏造である。実在の人物・団体・事件とはなんの関係もない。

けれどそれは私の真実だ。

私は嘘、たわごと、捏造でできている。私は、自分の肉の身を愛するように、自分の嘘、たわごと、捏造を愛する。私は自分の身体に服を着せて、寒さや怪我から守る。それと同じように私は、自分の真実に仮名を着せて、「事実」に反する「事実」という指摘や「ものの見方が一方的」という批判から守る。

ほとんど人目に触れる心配がなく、自分でも手の届かない、長いあいだ安全に保管される場所。考えた末に見つけたのが、ここだった。古い卒業エッセイ集は、ほとんど読まれることがなく、捨てられる心配もない。

ちなみに、昭和三十八年度を選んだのは、巻末の白紙のページ数が一番多かったからで、私の卒業年度とはなんの関係もない。私の卒業年度は平成、それも二十一世紀だ。

*

私が在籍していたあいだ、ル文研　ルネサンス文化研究部の部室は、一号館の三階の、西のつきあたりにあった。あなたの時代にもまだ一号館はあるのだろうか。石の床、高い天井、分厚い壁、真鍮のドアノブ。大正末期の骨董品だ。

ドアノブの壊れかけたドアを開けると、部室は薄暗い。蔵書が痛まないよう、窓に遮光カーテンをひいてあるからだ。部屋の明かりをつけ、カーテンをひらく。壁を天井まで埋めつくす蔵書に囲まれて、ル文研の活動がはじまる。

かつて昭英にはラテン語の授業があった。その頃のル文研には、活発な議論や、会報の編集作業があり、先輩が後輩にラテン語を教えていたりしたという。三十年以上も昔のことだ。私は、顧問の教師の昔話や、古い会報の記事でしか知らない。

私の時代、ル文研の活動とは、昔の会報の面白い記事をパソコンに打ち込んで、ホームページに載せることだった。私は古いノートパソコンをロッカーから出し、打ち込みをはじめ。

高校一年の春、部員は事実上、私だけだった。恵庭先輩は引退を宣言して、私に部長を任せ、二月から部室にこなくなった。ほかの部員はみな幽霊部員だった。やることといえばパソコンへの打ち込みばかりだから無理もない。

墓守、と恵庭先輩は言った。ル文研のかつての栄光を汚さないこと、かつての栄光を称えることが、いまのル文研のすべてだった。

ドアを叩く音がした。

恵庭先輩？

久しぶりに来てくれたのだと思った。いま、ル文研の部室を訪れる人といえば、私と恵庭先輩しかない。恵庭先輩がノックするのは変だとは思ったけれど、久しぶりすぎて敷居が高いのかもしれない、と考えた。

その瞬間まで、私は恵庭先輩を憎んでいた。

二ヶ月ものあいだ、ひとりきりで放っておかれるだなんて許せない、と思っていた。いわゆる、可愛さあまって憎さ百倍、という状態だった。けれど、ノックの音を聞いた瞬間に、憎しみは用済みになって消え失せた。喜びだけが胸に満ちる。

私がル文研で活動していたのは、半分は恵庭先輩がいるからだっただ。美しく、聡明で、馬鹿な、恵庭麻紀。

二ヶ月ぶりに来てくれた恵庭先輩を、なんと行って迎えようかと考えながら、「どうぞ」と呼び入れると　　恵庭先輩ではなかった。見知らぬ顔の、中等部の一年生だった。

真新しい大きめの制服が、昨日まで小学生でした、という風情を漂わせる。小さな体に鞆が重そうだ。クラスでも背の低いほうだろう。

「入部希望？」

「一年生はこくりとうなずいた。

「うちがどんな部か知ってる？」

「ルネサンスの魔術と隠秘哲学を研究するところ」

正確な説明だった。

私の時代、ル文研は俗にオカルト部と呼ばれていた。錬金術、占

星術、カバラといった固有名詞がひとり歩きした結果だ。毎年春には、そんな噂を聞いて勘違いした連中がやってくることがある。けれど、この一年生は、そういう手合いではないようだった。

入学して一週間にもならない新入生が、ル文研の活動内容を正しく知る方法は、たぶん一つしかない。

「ホームページ見たの？」

こくりとうなずいた。

「私は部長の川上忍。あなたは？」

「…佐々木撫子」

どうしても言葉にならない印象がある。

彼女が名乗った瞬間、私はとても強い印象を受けた。いまでもその印象をはっきりと思い出すことができる。目の前にあるように、たったいま聞いたばかりのように。なのに、その印象を具体的なものにしようとする、すべてが消える。夢のなかの出来事を思い出すように似ている。

この瞬間だけでなく、彼女に関することすべてに、そんなところがある。まるで夢のなかの登場人物のように、とても確かな存在感と、とらえどころのない輪郭が、彼女を描いている。

私は本棚から文庫本を二冊取って、渡した。

「入部テスト。これ読んで」

マーチン・ガードナー著、『奇妙な論理』と。魔術のたぐいに触れようとする人間なら、かならず知っておくべきことが書いてある。これを読んで理解することが、ル文研の入部テストだった。

「…ここで読んでいい？」

かまわないと言うと、彼女は窓際に、体を丸めて座った。

部室の窓は大きな出窓になっていて、ちょうど人間ひとりが乗って収まるくらいの幅と深さがある。そこに毛布を敷き、クッションをいくつか置いて、座れるようにしてある。暑くも寒くもない季節、打ち込み作業をする気になれないときには、そこに座って本を読む。すりガラス越しの午後の光は読書にちょうどいい。

恵庭先輩がそこに座るときには、長い手足をもてあますようにしていた。私は、恵庭先輩にいわせれば、窮屈そうにしていたという。撫子は、すっぱりと収まった。小さな体だった。

撫子は、とても気配が静かだった。特に、本を読んでいるときには、いるかいないかわからなくなりそんな気がした。

私はしばらくのあいだ、撫子の存在を忘れて、打ち込みを続けた。記事をひとつ打ち込み終えて、背伸びをしながら、窓際の撫子に目をやった。

撫子の髪はとても短い。耳も襟足も隠れていない。とても細いくせつ毛で、やや色素が薄く、光に透かすと薄い金色になる。

体の小ささに似つかわしく、撫子の頭はやや大きい。これから育つ、といわんばかりだ。実際、中学一年の春だから、まだかなり伸びる余地がある。

肌は、白というより赤い。薔薇色の頬、というのとは少し違う。元気な子供、という雰囲気でもない。一番びったりくる表現は、赤ん坊のような肌、だ。

活字を追う目はやや細められていて、見ようによっては眠そうにも、冷たそうにも見える。顔には表情はない。無表情さえもあらわしていない。無心、というしかない。

こうして並べ立てた形容は、実をいえば、なかば創作だ。このときの私は、こんなに具体的に観察したりしなかった。ここには、いろいろなきに観察したことを重ね合わせて、突拍子もないでたらめにならない範囲で演出を加えている。

演出の意図、つまり私の表現したいことは、一言に要約できる。私は、撫子の姿に目を奪われたのだ。

それほど長いこと見とれていたわけではなかった。撫子は私の視線に気づかなかった。私はすぐに作業に戻った。

特別なことが起こった、とは感じなかった。事実、このときにはまだ、なにも特別なことではなかった。下級生の鮮やかな姿に見られるのは、私にはよくあることだった。

ル文研の入部テスト 『奇妙な論理』を読んで理解することは、それほど難しいものではない。この本は、私に言わせれば、血沸き肉踊るような痛快な読み物だ。なのに入部希望者には、読み通すことさえできない人がよくいる。そういう入部希望者を見るたびに、本を読めないのにル文研に入ってどうするつもりだったのかと不思議だった。この謎はいまでも解けていない。

撫子は入部テストに合格した。

ル文研の新人部員がまずやるのは、本を読むことだ。最初に読むのは、中世から十七世紀までのヨーロッパの歴史の概説書、次がゴルドル『ソフィーの世界』、その次がセリグマン『魔法』、さらに次がクリステラー『ルネサンスの思想』。このリストはあと三十冊ばかり続く。このマラソンを完走すると、一人前の部員として認められる。

中等部は高等部より授業が短いので、撫子はいつも私より先に来ていて、部室で本を読んでいた。

撫子は窓際に小さな体を置いて、膝に乗せた本を、すりガラス越しの光で読む。私は古い会報の記事をパソコンに打ち込み、ときどき撫子の姿を眺めては幸福を味わう。単純な幸福は、一週間ほど続いた。

その日、いつものように撫子は先に部室に来ていて、いつものように窓際にいた。けれど、いつもと違って、膝には本はなかった。

撫子は、片足を体育座りのように腕でかかえこんで、膝頭に口をつけていた。

「なにしてるの？」

「…血をなめてるの」

「怪我した？ 転んだの？」

「…自分で切った」

悪い連想がかけめぐった。私は、自傷行為をする人には共感できないし、近づきたくない。

「どうして？」

「…血をなめたかったから」

「どれくらい切った？ 見せて」

もし深い傷なら保健室に連れてゆかなければならない。

見ると、かすかな血が、指先ほどの短い直線を描いている。かすり傷ともいえないような傷だった。紙で指を切るのよりもまだ軽い。私は安心しながら、

「どうして血をなめたいなんて思ったの？」

「…本を読んでもと、欲しくなるの。喉が乾くみたいに」

「本を汚さないでね」

撫子はこくりとうなずいた。

おかしい趣味だと思っただけで、気に留めなかった。ル文研には創立当初から奇人変人が多いという。恵庭先輩は学校一の変人といってもいい。私も、自分のことを普通と主張したいくらいには変人だ。

*

その翌日は、撫子はいつものとおりに本を読んでいた。私も、いつものとおりに打ち込みをはじめた。

打ち込みに一区切りついて、撫子の姿に目をやる。

撫子は、本を横に置き、使い捨ての剃刀を手にかけていた。

あの傷は使い捨ての剃刀でつけたのかと、私は初めて知った。そういえば傷は直線だった、と思い出した。

剃刀の刃を、品定めするようにしげしげと眺めてから、膝頭に刃先を当てる。息のつまる数秒間のあと、剃刀の刃をプラスチックの鞘に収める。

剃刀を鞘にしまうと、撫子は、血のかすかににじむ膝頭をしばらく見ていた。一瞬、首をかしげるようなしぐさをしてから、唇で膝頭に触れる。

「本を読んできると、欲しくなるの」と撫子は言っていた。いま撫子がなめている血の味を、想像してみる。といっても、特別な味は思い浮かばなかった。血の味が、人によってそうそう違うとは思えない。

私の血でもいいのかな。

あの唇で、私の傷をなめる。あの細くて色素の薄い髪の毛に、私の血が、ほんの少しとはいえ混じる。あの血の色の透けるような肌をした小さな体が、私から出たものでつくられる。

そう思った次の瞬間だった。

私は、いてもたってもいられないほど、怖くなった。

もし、自分のこの考えが、撫子に知られたら。

知られたら、どうだというのだろう。撫子も私も、お互い変なことを考える、というだけのことにはすぎない。と、今なら言える。そのときには、言えなかった。

そのかわりにか、私は一種の狂気に陥った。

強く願うことに力があるかどうかはわからないが、少なくとも、ひどく恐れることには力がある。恐れる理由がなにひとつない場合には、それを作り出すことができる。妄想という形で。

私の恐れが作り出した妄想は、「実は自分にはテレパシー能力があるのではないか」だった。

傍目には嘔飯物の妄想でも、巻き込まれた本人にとっては、容易に振り切れるものではない。過去の記憶を総ざらえして、反証を数限りなく並べ立てて、それでもほとんど安心できなかった。

私はやっこのことで恐慌をおさえこみ 指先は冷たくなって震えていた、打ち込み作業に戻った。正確には、戻ったように見せかけた。いつ撫子が私のほうを振り向いて、目が合うかもしれない。いま目が合ったら、私の考えはすべて筒抜けになるだろう、と私は信じて疑わなかった。

私はいまでも、当時の私を笑うことができない。どう思い返してみても、あのときの恐怖は確かなものとして揺るがない。

この程度のことではなにも、とあなたは笑うだろうか。私も笑いたい。けれど、できない。私の心のどこかは、今でもあの瞬間に釘付けにされている。理由のない理不尽な恐怖だとは、思うことができない。むしろ、ひとかけらの理由もないからこそ、恐怖としてより純粋で力があるのかもしれない。

ずっとあとになってから、気づいたことがひとつある。

撫子には、打ち込み作業のタイプ音が聞こえていたはずだ。そのタイプ音が途切れたことも。

*

翌日は、部活動勧誘の日だった。

新入生に部活動の内容を紹介して勧誘するイベントだ。TVの校内放送で、それぞれの部の部活紹介を流したあと、体育館で入部受付を行う。ル文研のような存続が危うい部にとっては、一年でもっとも重要なイベントだ。

私が入学したときには、ル文研の部活紹介は、ごく普通だった。

当時の部長が冒頭で、「魔術を知っていますか？ 魔術を使いたいという人は、来ないでください。魔術なんかはないと思う人も、来ないでください。知らない、という人を歓迎します」と演説し、あとは無難な沿革紹介だった。

部活紹介ではたいいていの部が、特に文化部はほとんど全部、これでもかというほど派手なツカミをする。「魔術」という言葉くらいしか目立つところのないル文研のツカミは、かなり地味なほうだった。次の年からは、恵庭先輩が部長だった。一年目は、「こんちわ、ぼくドラえもん」というツカミに始まる漫才をやらかし、ツッコミ役は私だった。入部受付に行列を作った。二年目は、「人間のクズ製造工場」という見出しに始まる社会派ドキュメンタリー風の

紹介をやらかし、前年ほどではないものの人を集めた。

どちらの年にも、新入部員は結局ひとりも残らなかった。それも、ガレンにたどり着く前に全滅というありさまだった。恵庭先輩の態度にも問題があったものの、新入部員の素質も問題があった（いずれにせよ恵庭先輩のせいなのだが）。今年こそは、まともな部員のくる部活紹介をする必要があった。

幸いなことに、私が入部したときの部活紹介の原稿と資料が残っていたので、それを使った。あとで恵庭先輩に聞いたところでは、十年以上も前から同じ原稿と資料を使っているらしい。

部活紹介は、事前にビデオを収録しておいて放送する。収録はずつと前に終わっているので、部長が当日にすることといえば、入部受付で入部希望者を待つことだけだ。

入部受付の手応えは、かんばしくなかった。

新入生が入ってきて、五分経ち、十分経っても、入部希望者が一人もこない。もちろん撫子はすぐにやってきて隣に座ってくれたが、それだけだった。

そういえば私が入学したときも、入部希望者は私だけだった、と思いついた。行列のできる部活紹介をやった恵庭先輩の気持ちがよくわかった。左右の文化部　マンガ部と文学部だった　に人が集まっているのに、自分のところにだけ誰も来ないのは、やりきれないものがあった。

もうすぐ時間が終わろうとするときになって、やっと最初のひとりが来た。

終了間際に来るのは、ほかの部を回っていたということだから、あまり期待できない。しかも、高等部だった。

私がいた時代の昭英は、高等部でも生徒を募集していた。欠員を埋める程度のもではなく、一学年の生徒数を五割ほど増やす。このため、部活紹介を受ける新入生の三人に一人は高等部だ。マンガ部や文学部ならいざ知らず、特殊な知識を扱うル文研では、高等部はあまり歓迎されない。

「ルネサンス文化研究会？」

彼女はやや早口に尋ねた。

短い髪を小綺麗に染め、眉を流行の形に整えている。顔の産毛が始末してあるのは、化粧をしている証拠だ。雰囲気からして期待できそうになかった。昭栄に入るだけあって頭は悪くなさそうだが、じっくりものを考えるよりも、反射神経で口をきくほうが得意そうだった。

「フラヴィウス・ミトリダテスやピストリウスに興味があるなら、どうぞ」

相手が知っているはずもない人名を並べ立てて、追い払おうとした。が、彼女はひるまなかった。

「部長さん？ 一年生？」

「ええ」

「よろしくね」

彼女は遠藤緋沙子と名乗った。

*

ル文研の過去の栄光なるものの正体は、実は、少々怪しい。私のみるところ、ル文研八十年の成果をすべてあわせても、アーサー・エドワード・ウェイトひとりにまったくかなわないだろう。

それでも、栄光など存在しなかった、とはいえない。ほんの小さなものではあっても、それは確かに存在する。

ル文研の栄光の時代は三度ある。最初は創立期、アルフレッド・ハーマン・スチュアートの時代だ。

スチュアートについては、ル文研会報、昭和二十七年第三号七ページ、樋川幸子「沈黙の人 A・H・スチュアート」に詳しい。ごく簡単に要約すると、彼は本国での冴えない学究生活を捨てて、ラテン語を教えるお雇い外国人として日本に来了。ルネサンスを専門とする哲学史家だった彼は、ルネサンスに書かれた思想関連の文献を多く集めていた。ル文研のラテン語の蔵書は、彼が寄贈したものだ。

昭和三年、彼はル文研を立ち上げた。当時はクラブ活動という形態ではなく、学校の空き部屋を借りての、一種のサロンのようなも

のだった。彼は会員たちに、自分の専門分野であるルネサンスの哲学を教え、当時のラテン語文献を日本語に翻訳させた。

東京都の図書館に納本された会報は比較的よく読まれ、参照された。ル文研会報、昭和十五年第一号七ページ、恩田マチ子ほか「スチュワート先生を偲ぶ」によれば、学術論文での参照が二、大衆向け雑誌での参照が十五となっている。

もしこの状態を維持していれば、小さいながらも世界的な影響力さえ夢ではなかったかもしれない。が、この達成の多くは、スチュアート個人の能力によるものだった。二十歳にも満たない人々の、五年間しか在籍できない集団に、それほどの力があるわけがない。昭和十三年、スチュアートが病氣療養のために帰国した後、ル文研の能力は目に見えて低下した。

そのとき戦禍が襲った。会報の発行は、昭和十九年から四年間にわたって中断する。ル文研の過去の栄光というイメージは、戦禍によって作られた部分がある。もし戦争がなければ、ル文研はただ衰えて消滅しただろう。

そのとき樋川幸子が現れる。

彼女は、ル文研を甦らせたというより、ル文研を造り出した。ル文研の創始者はスチュアートだが、今日まで存続する力を与えたのは、樋川幸子だ。

彼女の卒業する前の三年間の会報は、ページのほぼ八割が、彼女の翻訳と記事だ。高原秀雄『神秘の再生』の注釈には、ル文研会報を指して「(翻訳の質は)しばしば劣悪だが、樋川の校訂したものは例外的に信頼できる」とある。さらに、シヨールム『ユダヤ神秘主義の主な潮流』の抄訳、ブラウ『ルネサンスにおけるカバラのキリスト教的解釈』の全訳も、彼女の手になるものだ。

第三の、そして最後の栄光は、昭和三十五年度の部長、大村奈緒美が与えた。スイスからの帰国子女で、ドイツ語・フランス語・イタリア語に堪能だった彼女は、多くの文献の抄訳を作って部内閲覧に供した。もし彼女がもう五年遅く生まれていれば、私はスクレの初期の論文を読むことができたはずだ。

彼女が作った抄訳の量は、桁外れだ。言い伝えによれば、彼女は

まんがを読むような速さで文献に目を通した。一章あるいは論文ひとつを読み終えると、ただちにその翻訳を、なにも見ず、一瞬も筆を止めることなく、書き進めたという。

昭和四十六年、一九七一年、昭英はラテン語の授業を廃止した。ル文研の黄金時代は終わり、墓守の時代がはじまった。

文献を集め、もし英語の文献なら抄訳を作る。後輩を教育し、伝統を受け継ぐ。まるで、いつかラテン語の授業が再開され、ル文研が再生する日が来るかのよう。

もしあなたがルネサンスの思想史に詳しくれば、ル文研の傾向はもう察しがついていると思う。

ル文研の興味の中心は、キリスト教的カバラだ。ブラウ『ルネサンスにおけるカバラのキリスト教的解釈』の結論には、こうある。「キリスト教思想家によるカバラの利用は、重要なものを残さずに過ぎ去った一時の流行である」。

私はル文研の墓守だったが、ル文研そのものが、ルネサンスの流の墓守だ。

*

その日の部活は、昨日までと同じように、部室には私と撫子だけだった。

緋沙子は、入部テストの『奇妙な論理』とを持って帰った。恵庭先輩は来なかった。

誰かに来てほしい、そう切実に祈った。自分の血をなめる撫子を、自分ひとりだけで見るとは耐えられない。もし見てしまったら見ても、私はなにもしないだろう。でも、自分の心に耐えられない。もっとはつきりいえば、自分の欲望を見るのに耐えられない。

誰かがいれば、たとえ自分の血をなめる撫子を見ても、私の心は騒がないですむだろう。人が横にいるのに、撫子に私の血をなめさせることなど考えられない。

今日こそ恵庭先輩が来てくれるようにと祈りながら、けっして撫

子のほうを見ないようにして、打ち込み作業を始めた。

「…部長さん」

撫子の声に、私は作業の手を止めた。

「なに？」

「…部長さんと、おしゃべりしたい。いい？」

撫子は窓際を離れて、机の向かい側に座った。

私は無口なほうだし、無口な人を無理にしゃべらせる趣味もない。だからこのときまで、必要なこと以外はほとんどしゃべらずにいた。

「いいよ。」

佐々木さんって、兄弟とかいる？」

首を左右に振って撫子は言った、

「…部長さんは？」

「いない。TVとかよく観る？」

また首を左右に振って、

「…部長さんは？」

「スマスマなんかときどき観るけど」

「…そう」

「家、練馬だよな。私も練馬。小学校はどこ？」

「…××小学校。…部長さんは？」

ずっとこんな調子だった。なにを訊かれてもごく簡単に答え、「部長さんは？」と問い返す。

簡単な受け答えのなかに、撫子の暮らしぶりがうかがえた。少ないながら友達がいて、好きなゲームソフトがある（私の知らないゲームだった）。TVはまったく観ず、休みの日に出かけたりもせず、ただひたすらに本を読む。

弾まないといえば弾まない、けれど途切れることのないおしゃべりを、撫子が楽しんでいるのかどうか、よくわからなかった。だいたい私はそれまで、撫子の笑顔を見たことがなかった。撫子は無表情でも無愛想でもなかったけれど、愛想笑いのたぐいは一切しなかった。

「… 恵庭先輩って、私の前の部長なんだけど、会ったことない

でしょう」

撫子はこくりとうなずいた。

「素敵な人なんだけど…… 本人を見るのが一番か」と、話すことがなくなり、会話が途切れた。

わずかな間のあと、撫子は首をかしげるようにして、言った。

「……いろはにほへと」

わけがわからないまま私は、

「……ちりぬるを？」

撫子は、目をきらりと輝かせた。

「わかよたれそ」

「つねならむ」

撫子は笑顔を見せた。とろけそうな、あるいは、とろかすような笑みだった。

「うめのおくやま」

「けふこえて」

心を通じた、と思った。

「あさきゆめみし」

「ゑひもせず」

普段から血が透けて赤い頬をいっそう紅潮させて、撫子は喜んでいた。

今度は私から謎かけをした。

「鼠」

「……牛？」

「虎」

「兎！」

そうして十二支を最後まで並べ終わると、撫子は満面の笑みで言った。

「部長さんて、いい人。この部に入ってよかった」

「どーもどーも」

私はわざとそっけなく答えた。

きっと私は、この三十秒間で、撫子に恋をしたのだと思う。

緋沙子は入部テストに合格した。

「次はこれ読んで」

『世界の歴史』のなかの一冊を差し出すと、緋沙子はむっとした顔で、

「読むもんを指図されるの?」

「部員のレベルを保って、ル文研の伝統を守るのが私の仕事なの。

ほっとくとオカルト趣味の部になるでしょ? うちの部でやってい

くつもりなら、これを読んで」

「読まなかったら、どうなるっての」

「うちの本は見せられないし、部室の出入りも遠慮してもらおうわ」

私の口のききかたに、緋沙子はかちんときたようだった。

「あんた偉そう」

私も、伊達や酔狂で偉そうにしているわけではなかった。ル文研

の新人部員教育は、なあなあでは済まされない問題だ。

「あなたは生意気ね」

緋沙子は、につ、と笑った。

「お互い様」

「だといいわね」

差し出された『世界の歴史』を受け取ると、緋沙子は、窓際の撫子に近づいた。

「ねえ、お嬢ちゃん、こんにちわ。私は遠藤緋沙子。お嬢ちゃん

は、お名前なんなの?」

話し掛けると、

「…佐々木撫子。こんにちわ」

「撫子? ラブリーな名前じゃないの。よくナンパされる?」

「…名前で?」

「違う違う、外見で」

「…されない」

「コナかけてくる上級生とかいない? 『撫子ちゃんのお姉さん

になってあげようか?』とかいって」

「…いない」

うるさがつているような気配が、かすかに声に混じる。緋沙子もそれを感じ取ったのか、

「じゃ、よろしくね」

窓際を離れる。

と、今度は、壁の展示物に目を留めた。

大型の拳銃と、タロットカードの大アルカナ二十二枚。拳銃は鎖をつけて壁につないであり、タロットカードはパネルに入っている。タロットカードはともかく、拳銃はあまりにも場違いだ。

「部長さん、これ、ピストル？」

「ええ」

「どうしてピストルなんて飾ってあるわけ。これ、なんか、本物っぽくない？」

黒光りする金属の塊には、楽しむためではなく使うために作られた、道具の雰囲気漂う。凶器、というような禍々しさはない。単なる機械で、単なる道具だ。それだけに一層恐ろしい、ともいえる。

「本物。弾があれば撃てるって。トカレフと同じ弾だそうだから、そのへんで買ってきたら？」

緋沙子はぎょっとした様子で一步退いた。

「冗談？」

「当然。でも、本物は本物」

私は壁の拳銃をとって、鍵で鎖を外し、分解しはじめた。重量でいえばノートパソコンより軽いはずなのに、はるかに重く感じる。重みがぎっしり詰まっているような重さだ。

展示物の講釈をするときには、話しながら拳銃の分解結合をしてみせる習わしだと教わった。私が入部したときの部長もそうしていたし、恵庭先輩もそうしていた。もしこれがずっと昔からの伝統だとすれば、不器用な人や、握力のない人が部長になったときはどうしていたのだろうか。分解結合には、ある程度の握力と器用さが必要。

「どういうこと？」

「銃身を塞いで、撃てないようになっているの」

ネジを使わずに部品の噛み合わせだけで組み立てられた箱根細工のような仕組みを、ひとつひとつほどこいてゆくと、不思議な形をした部品が次々と姿を現す。十九世紀末、シャーロック・ホームズがまだ活躍していた時代のメカニズムだ。デモンストレーションが目的なので、手間のかかりすぎる部分や傷のつきやすい部分は分解しない。

「はー。それはわかったけど、なんで飾ってあるわけ」

「うちの初代顧問のスチュアート先生が、学校を辞めるときに寄贈していったものなの。壁に飾っておくようにって。

なんでだと思う？」

「知るわけないじゃない」

「一人前の部員になったら教えてあげる」

もしあなたがル文研の部員なら知っていると思う。答は、新入部員や来訪者にハツタリをかますため、だ。オカルト趣味の人々が期待するような、神秘的な意味はない。

スチュアートの意図は、神秘的な意味などない、ということにある。惑星の公転半径と正多面体との幾何学的関係に意味がないのと同様、この拳銃には、ハツタリ以上の意味はない。

意味がないことを受け入れられない人間は、ル文研にふさわしくない。ル文研が扱うのは、存在しない意味を求めてさまよった人々の思想だ。

「は、知りたくもないわ。」

こつちのタロットカードは何？」

「十九世紀の中頃に、イタリアで作られたタロットカード。左上のカードを見て」

男が作業机の前に立っている、という図柄だ。作業机の上に、靴と、靴を修理する工具類が置いてある。男は帽子をかぶり、左手に杯を持っている。

「靴屋？」

「ええ。正確には、靴修理職人」

緋沙子はうさくさげに、

「タロットカードに靴屋のカードなんてあったっけ」

「今の日本で普通に流通してるのだと、靴修理職人じゃなくて魔術師になってる。でもイタリアのタロットカードにはこういうのもあるの。」

一説には、もとは意味のわからない言葉だったのを、誰かが間違えて靴修理職人と読んだんだって言われてる。

でも、本当にそうかしら？

ヤーコプ・ベームって知ってる？」

「知らない」

「十七世紀ドイツの、有名な神秘思想家。当時は絶大な影響力のあった人で、ヨーロッパの思想史に詳しい人なら必ず知ってる。この人の本職が、靴修理職人だった」

「その人にあやかって靴屋にしたんじゃないかってこと？」

「かもね。でも、違うかもしれない。」

旧約聖書に出てくる、エノクって知ってる？ 『ノアの方舟』を作ったノアの曾お祖父さん」

「知らない。また靴屋？」

「ええ。旧約聖書には書いてないけど、そついう伝承があるの。」

十四世紀ドイツのユダヤ人社会の伝承にいわく、エノクは靴を作りながら瞑想した。甲皮を靴底に縫いつける作業に瞑想を伴わせて、天上世界を地上世界に結びつける作業に変えた。そうして仕事に励んだエノクは、とうとう天使メタトロンになりましたとき。めでたしめでたし。

次はチベットのタントラ。導師カマラという人の伝説が、文献に残ってる。この人も靴職人で、靴を作りながら瞑想して、最後は天のかなたにさようなら」

「要するに、靴屋って実は神秘的な職業ってこと？」

「最後は、人類史上最大の権力者、ヨシフ・スターリン。」

スターリンの父親は、靴職人だった。

それだけじゃない。スターリンの役職名は、書記長。エノクが変身してなった天使メタトロンは、『天上の書記』とも呼ばれている。そして天使メタトロンの名は神の名に似ていると伝えられ、そのため神に次ぐ力を持つ天使であるとも考えられている。

どう？ 靴職人の世界支配は。フリーメーソンなんて目じゃないでしょう」

もしあなたがル文研の部員なら知っているだろう。この話は、ル文研に代々伝えられている冗談だ。作者は大村奈緒美だという。

新入部員にこの話を聞かせておどかすのが、ル文研の伝統だ。新入部員当時の私は、ものの見事におどかされた。頭がくらくらして、部長が怪物のように思えた。

この話を撫子に聞かせたときには、撫子は、わかっているのかどうかよくわからない顔をしていた。世界支配など知ったことではない、という風だった。話が終わって最初に言ったことが、「…それ、部長さんが考えたの？」だ。撫子は大物だった。

この話は、適性のない新入部員をよりわけするためのテストでもある。ただの冗談だと言われてもわからず、靴職人の世界支配をいつまでも真に受けている新入部員がたまにいる。そういう人にはル文研は向かない。ル文研の扱う物事は、もっと悪質な冗談に満ち満ちている。

緋沙子に関しては、冗談がわからないということはないだろう。手の込んだ冗談として理解して、ル文研の伝統の凄みを感じるはずだ、と思った。

間抜けな私の頭に、緋沙子はハンマーを振り降ろした。

「要するに、『フーコーの振り子』「じっじっ」」

目から火が出た。

髪を丁寧に染めて眉を形よく整えている、きつと学校を一步出れば派手に化粧をする、いかにも当世風のなりをして、流行に忠実に従っている緋沙子が、あの分厚く、あのくそ馬鹿馬鹿しい、あの『フーコーの振り子』を読んでいる。

あとから考えれば、私の愚かさは明らかだ。もし緋沙子が私の先入観どおりの人間なら、そもそもル文研に入ろうとするだろうが。ともあれ私は貴重な教訓を得た。人は見かけによらない。

「……………まあね」

「これって、そのために飾ってあるわけ。馬鹿じゃない？」

「まさか。本当は、誤訳についての教訓をこめて飾ってあるの。」

昔のル文研は、ラテン語の文献を日本語に翻訳してたの。たかが部活と思っても、もしかするとそのタロットカードみたいに、ずっとあとまで影響が残るかもしれない。翻訳を手がけるからには、覚悟を決めるように。それがこのタロットカードの意味」

私は拳銃の分解結合を終えて、壁に戻した。鎖につないで鍵をかける。

「ふーん。べつに宝の地図ってわけじゃないのか」

「ええ。テンプル騎士団の暗号でもないわ」

「そういえば昔、『風船少女テンプルちゃん』ってアニメあったの知ってる？ 関係ないけど。」

「じゃ、帰るわ。さようなら」

と、緋沙子は出ていこうとした。

「ここで読んでけば？」

「は？ 部長さんでもしかして、学校まで歩きで通ってる？ 私は電車なの。帰りが遅くなったら電車が混むじゃない」

私も電車通学だ。けれど、緋沙子に指摘されるまで、電車が混むから早く帰ろうなどとは思いついたこともなかった。恵庭先輩と一緒にいられる時間が、電車の混雑と引き換えになるわけがない。

「そうね。」

それと、『部長さん』っていうのはやめて、名前で呼んで

緋沙子に「部長さん」と呼ばれると、なんとはなしに居心地が悪い。

「名前って、忍？」

「苗字で」

「川上？」

「さん付けで」

「川上さん？」

「ええ」

馬鹿にしたように鼻で笑い、緋沙子は言った、

「川上さん、佐々木さん、ご機嫌よう」

念の入ったことに、「ご機嫌よう」のアクセントは「よ」だった。私はすかさず、

「お振りあそばせ」

「なにそれ」

「ル文研の別れの挨拶。『がんばれ』っていう意味」

緋沙子は無言で、あきれたような顔をしてみせてから、出ていった。

*

緋沙子が出ていくと、撫子が言った、

「…部長さん？」

「ん？」

「…『川上さん』って呼んだほうがいい？」

私はちよつと考えた。「川上さん」は「部長さん」よりもよそよそしい。かといって今のままだと、緋沙子に聞きつけられたら絡まれる。

「遠藤さんがいるときはそうして」

撫子は猫のように目を細めた。

「…秘密？」

いつもより低い声で。

意図は明らかだった。誘惑、挑発、踏み込んでこいというサイン。私は答えなかった。頭が混乱して、答えることができなかった。

あの瞬間に考えようとしていたことを整理すると、以下のようになる。

第一に、撫子は現状をどう認識しているのか。私が撫子に対して抱いている感情を、どんな根拠にもとづいてどのように把握し、その把握についてどれくらい確信を持っているのか。また、撫子は私のことをどう思っているのか。ちよつとした好奇心か、それ以上か。

第二に、撫子の目指していることはなにか。現状への認識を深めることか、現状を変更することか、それともその両方か。変更することだとしたら、どのようにか。

第三に、私はどう反応すべきか。私はなにを目指すべきか。目標

は実現可能、かつ、行動を決定できるほど具体的でなければならぬ。「幸福になりたい」という目標が当たり前で無意味なのと同じくらい、「撫子と親しくなりたい」という目標は無意味だ。

これら全部を、一瞬で考えて決めることのできる人間もいる。緋沙子はそういう人間だ。撫子ならそもそも考えない。恵庭先輩は、わからない。恵庭先輩がものを考えていたのかどうか、私には一生わからないかもしれない。

私は、考えようとして、頭が混乱した。

外からは、ぼかんとしているように見えただろうと思う。撫子は、返事をしない私を見て、読書に戻った。

それから一時間ほどのあいだ、私の頭は猛烈に回転した。回転のほとんどは、空回りだった。

失われた機会を悔やむのが三割くらい。ああしておけばよかった、こうすればよかったと、過ぎたことを果てしなく考えた。

撫子の胸のうちについての当てずっぽうが四割くらい。からかいの気持ちと好奇心のバランスを、根拠もなくあれこれと考えた。

次の機会がやってきたときにどう対応するかの変態が二割くらい。あとで思い返せば抱腹絶倒ものの、あまりにも虫のいい機会を妄想しては、自分がどうするかを考えた。

少しは前向きなことも考えた。自分が撫子に求めるものはなにか、を検討するのが一割くらい。そして、こちらから機会を作り出す方法を探すが、ほんの少し。

考えるといっても、撫子に怪しまれないように、パソコンに向かって打ち込み作業をしながらだった。作業をしながら十秒に一度は、撫子のほうに目をやった。こちらから機会を作り出す方法を探して、最初に見つけたのがこれだった。

一時間後、その機会が訪れた。

撫子は本を置き、鞆を開けた。刃にプラスチックの鞘がついた、使い捨ての剃刀を取り出す。

「血をなめるの？」

撫子は驚いた様子もなく、こちらを振り向き、うなずいた。

私は窓際に歩み寄り、撫子の手にある剃刀を、指でつまんだ。

「私の血じゃいけない？」

撫子は困ったような顔をした。

「…もし私が肝炎ウイルスのキャリアだったら、部長さんに伝染るかもしれない」

「かんえん？」

なんのことかわからなかった。

「B型肝炎とC型肝炎」

幼い口から現実的なことを言われて、私は面食らった。

ほとんど杞憂だとは思っても、事が事だけに、笑い飛ばすことはできなかった。それに、考えてみれば、感染のリスクは、私より撫子のほうがはるかに大きい。適当にあしらうわけにはいかなかった。

「感染してる可能性はありそう？ ヤバそうな医者にかかったとか、輸血を受けたとか。それと、性交渉」

撫子は首を左右に振った。

「私も、感染してないと思う。」

口のなかをどこか怪我してる？ 喉は腫れてない？」

今度も撫子は首を左右に振った。

「なら、たぶん大丈夫」

私は手近な椅子を引き寄せて座った。

膝を、剃刀で切った。ごく浅く、とはゆかず、紙で切ったよりは深い。たちまち血がにじんで盛り上がる。

撫子は、私の膝をじっと見つめていた。

「いらない？」

撫子は靴をはき 窓際に陣取るときには靴を脱ぐ 、私の前にしゃがみこんで、膝に、唇をつけた。

舌が触れる。小刻みな動きで、血をなめとる。

私は、撫子の頭のとっぺんを見ていた。撫子の髪はごく短く、くせつ毛で、とても細い。制服の襟から背中がちらりと見えた。血色のいい肌が、その下に流れる血を思い出させる。

そのとき私は、たしかに、撫子を犯していた。

犯す、という言葉では弱すぎる。けれどほかにいい言葉もない。

撫子の体の隅々まで、皮膚も、髪の毛も、唇も、入っていつて、つ

かみとり、愛でる。

撫子が唇を離した。

「もういいの？」

訊くと、撫子はうなずいて、私の膝を見た。まだ血が止まっていない。

「…待ってて」

撫子は鞆から、ポケットティッシュとバンドエイドを取り出し、膝をぬぐって傷をふさいだ。

「どんな味だった？」

「…私のと同じ」

うつむき加減で、苦いものでもなめているように眉を寄せながら、唇は笑っているように見える。それが撫子の、照れている表情だとわかるようになったのは、もっとあとのことだ。

撫子は、ふい、と踵を返して、もとのように窓際に陣取った。

私もノートパソコンの前に戻って、打ち込みを再開した。打ち込みだけでなく、頭の空回りも再開した。

撫子が肝炎ウイルスのことを持ち出したのは、遠回しな拒絶のもりだったのではないか。

肝炎ウイルスやHIVの性質から考えれば　唾液からは感染しない　、「部長さんに伝染るかもしれない」というのは本当は逆で、私が撫子に感染させる危険のことを言っていたのにちがいない。そのまま言うのは失礼だから逆にしたのだ。

もしかすると撫子は、私に肝炎ウイルスの知識などあるわけがない、と思っていたのかもしれない。もし知識があるなら、相手にほとんど一方的にリスクを負わせるようなことを自分から持ちかけるはずがない、と。ところが一応の知識はあったので困ってしまい、重ねて拒絶するのも気づまりで、不承不承ながら私の強引さに負けたのかも知れない。

撫子が目の前にいるのだから、本人と話せばいいものを、これまでたつまらない理由のせいで訊けず、私の頭は延々と空回りしつづけた。

キリスト教的カバラとはなにか。

それはまさにル文研の興味そのものなので、答えるのは難しい。ここではごく簡単に、その上辺だけをなぞる。

カバラとは、ユダヤ教の神秘主義の一派だ。中世、十二世紀フランスのプロヴァンス地方で発生した。もともと、当のカバラ主義者はそうとは認めず、より古い起源を主張したが、現代のヘブライ学の検証に耐える主張ではない。

その出自はともかくとして、カバラはユダヤ人とともに長い歴史を歩み、ユダヤ人の精神を受け止めて発展していった。カバラの思想は現在でも、ユダヤ人の精神文化の基層をなしているという。

けれどキリスト教的カバラは、このような本来のカバラではない。ルネサンスの思想界は、キリスト教以前の思想に目を向けた。ギリシャ・ローマ時代に書かれた文献が、数多く発掘されて出版された。この発掘作業のなかで、古代宗教に光が当てられた。キリスト教を発展させる鍵が古代宗教のなかにある、と考えた一部の思想家たちは、さかんにこれを研究した（そうとは考えなかった思想家も多い）。

結果的には彼らは、とんだ食わせ者ばかりをもてはやした。ルネサンスに発掘された文献のうち、実際にキリスト教以前の起源を持つものは、ほとんどない。その食わせ者のひとつが、カバラだった。

世界史の教科書にも出てくる、ピコ・デラ・ミランダ、あの『人間の尊厳について』の著者が、キリスト教的カバラの開祖だ。ピコは、あらゆる哲学の統合を目指した。あらゆる哲学がじつは同一のものであることを、カバラによって証明できる、とピコは信じた。

カバラは、ヘブライ語の文字を思弁的に操作する。操作してどうするのかというと、天使の名前やトーラーの語句について思弁的な論証を行う。ピコはこの文字操作によって、「イエス」という名前が神の名前「YHWH」の発展したものであり、イエス・キリストが受肉した神、救い主であることを、思弁的に論証した。

ただし、カバラの文字操作を用いれば、おおよそどんなことでも思

弁的に論証できる。『サザエさん』の成功を論証するくらいは造作もない。さらに、ピコの論証には、いくつかの誤りが含まれている。ヘブライ語の「イエス」の綴りからして間違っていた。

けれど重要なのは、事の馬鹿馬鹿しさではなく、それを真に受けた人々のほうだ。世界史の教科書に出てくるだけあって、ピコの影響力は大きかった。

キリスト教的カバラが普及した理由は、ピコの名声のほかにも、いくつかある。

もっとも重要だったのはおそらく、由来が古くて目新しい、という点だ。ルネサンスには、中世的でない目新しい思想で、由来が古いものなら、どんな思想にも支持者がついた。

ルネサンスの哲学の基盤である新プラトン主義に似ていることが、キリスト教的カバラの流布を容易にした。このあたりの事情は、近代のオカルト思想がしばしば科学のまがい物であるのと似ている。

カバラは本来、ユダヤ教の思想だ。ユダヤ教の思想でキリスト教の正しさを証明すれば、ユダヤ人をキリスト教に改宗させることができる、と一部の思想家は考えた。

カバラの文字操作の、どんなことでも思弁的に論証できる、という性質は重宝がられた。箒にも棒にもかからないような主張でも、ちよつとカバラをふりかければ、もつともらしく見せかけることができた。

また、カバラの文字操作は聖書を利用するので、宗教的に安全なものと考えられた。ルネサンスは魔女狩りの時代でもある。

ヨーハン・ロイヒリンは、キリスト教的カバラに魔術の力があると信じた。いつの時代にも、魔術と聞くと飛びつく人々がいる。キリスト教的カバラは、聖書を用いる安全な魔術の流派としても広がった。

そうして 「重要なものを残さずに過ぎ去った一時の流行である」。

緋沙子は『世界の歴史』の一卷を、一日で読んできた。読み終えた本を私に差し出して、

「次は？」

「その前に質問。」

スペインからユダヤ人が追放されたのは何年？」

「一四九二年」

「どうやら真面目に読んでいるらしい。私は本を受け取り、次の巻を渡した。」

すると今度は自分の番というわけか緋沙子は、

「ピコが九百の論題を発表したのは何年？」

「一四八六年」

「さすが」

緋沙子は次に、窓際の撫子に近づいて、

「あなたのこと、撫子って呼んでいい？」

撫子はこくりとうなずいた。

「私のことは、緋沙子って呼んでくれる？」

ふたたびうなずく。

「撫子のおうちはどこ？」

「…西武新宿線の××」

「あちゃー、私と反対方向じゃない。ついてないな」

と、そのとき 歌声が聞こえてきた。

「ちよいと一杯の つもりで飲んで

いつの間にやら ハシゴ酒」

ためらいのない朗々としたソプラノだった。だんだんと近づいてくる。

「気がつきやホームの ベンチでゴロ寝

これじゃ体に いいわきゃないよ

わかっちゃいるけど やめられねえ」

クレージーキャッツの名曲、『スーダラ節』。私の知る歌謡曲のなかではもつとも難しい曲だ。リズムと音程が完璧でなければ、そもそも歌にならない。完璧な技術の上で、楽しげに、軽々と歌う。それができて、やっとまともな『スーダラ節』になる。

この歌い手には、それができていた。まともなだけでなく、それ以上のものだった。楽しげでありながら切なく、軽々としていながら寂しげな。

ドアが開き、歌い手が姿を現す。

「こにやにやちわー」

「先輩！」

本当に嬉しいことは、特別な出来事ではなく、毎日のようにあることなのだと思う。それは毎日のことなので、その嬉しさが見えなくなっている。その嬉しさをはっきりと自覚するには、とても辛い思いをしなければならぬ。

私は二ヶ月のあいだ、恵庭先輩に会わなかった。

会わなかったせい嬉しさが増したのではなく、よくわかるようになった。こんなにも嬉しいことが毎日、当たり前のように起こっていたのだと、はじめて私は知ることができた。

恵庭麻紀。彼女への思いは、いまでも私の胸を限りなく満たしてくれる。

「しい」

私のことだ。恵庭先輩は私を『しい』と呼んだ。

席を立てて出迎えた私を、恵庭先輩は、抱きしめる。

恵庭先輩は私より二センチほど背が低い。私が入部したときには、恵庭先輩のほうが四センチくらい高かったのに、中等部のあいだに追い越してしまった。

「二ヶ月ぶりね。私に会わなくて、泣いた？」

私ね、しいが泣いてるかなーって思って、すっごく 楽しかった。

しいも、私が喜んでるの、わかった？ わかってなかっただろうなー」

「わかってました」

「しい、強がり言っても、かわいいよ。素直なものもかわいいし、とぼけるのもいいなー。どれにする？」

「や……」

「はい時間切れ」

すい、と恵庭先輩は私を突き放した。もてあそばれて戸惑う私をよそに、

「新入生、まだ二人も残ってるんだ。しい、やるじゃないの。あんた、ずいぶんでつかいじゃない。高等部から始めるの？ ハンデきつついわよー」

「…お邪魔なら帰りますけど」

「そう邪険にしなさんな、すぐ消えるから。」

あなたはちっちゃいわねー。ちゃんとご飯食べてる？ 綾波のマネして肉嫌いとか言ってるじゃないでしょうね？」

「…食べてる」

「そりゃ結構。あなたが次の部長だからね。ル文研八十年の歴史が続くか途絶えるかが、この双肩にかかっているわけよ。ん、いい感じ」

恵庭先輩は撫子の肩を揉んだ。

「…セクハラ」

「おお、ごめんなさい。」

しい、ちゃんと仕事してるんだね。ホームページ、毎日見てるよ。泣かないでね。じゃ、バツハハイ」

「え、もう」

「私は引退したの」

切れのいい身のこなしでドアを開け、恵庭先輩は出ていった。

緋沙子はあきれたような声で、

「なに、あれ」

「私の前の部長だった先輩。恵庭麻紀」

「へー。恵庭さんってのは、いちやつくところを人に見せびらかすのが趣味？」

痛いところを突かれて私は、

「ノーコメント。いずれわかるわ」

とごまかした。

去年と一昨年、つまり部長だったときの恵庭先輩は、新入生たちの面前で私に愛情を示したり、公然と私をひいきしたりした。

恵庭先輩が部長だったあいだ、ル文研にはひとりの新入生も定着

しなかった。恵庭先輩の振る舞いが大きな原因だったことは否定できない。そんな状態を、私が密かに喜んでいたことも。

それ以上はなにも言う気が起きなかったのか、緋沙子は撫子のほうに向き直って、

「撫子って、肩を触ったらセクハラ？」

「…無断だったから」

「なるほど。触っていい？」

撫子はうなずいた。緋沙子は撫子の肩に触れて、

「ほんと、小さくていい感じ。身長、クラスで何番目？」

「…前から二番目」

「だろうね。」

ね、撫子、私の名前は覚えてくれた？」

「…遠藤緋沙子」

「ん、ありがとう。また来週ね」

「…さようなら」

撫子に向かつて小さく手を振りながら、緋沙子は出ていった。

「…さっきのが、恵庭先輩？」

珍しく撫子から話しはじめた。

「ええ」

「…同じ学校なのに、会いにいかなかったの？」

「来るなって言われたから」

「…どうして」

「もう引退したからって」

時々顔を出すから、いい子で待ってなさい、と恵庭先輩は言った。そのとき、言葉にしなくてもわかった。恵庭先輩は、私を待たせておきたいのだと。

恵庭先輩には、人を突き放して喜ぶところがある。私はいつも、それが恵庭先輩の手だとわかっていても、突き放されるたびにうるたえた。

「…変な感じ」

撫子は不快そうに眉をひそめた。

「恵庭先輩のこと嫌い？」

「…いいえ」

「そう、よかった」

恵庭先輩が部長だった時代、ル文研の新生はほとんど例外なく、二種類に分けられた。恵庭先輩を嫌う人と、近づきたいと望む人と。嫌う人は、そのまま部活に来なくなった。近づきたいと望む人は、はじめは私を敵視し、そのうち部活に来なくなった。

「…でも部長さんは嫌い」

「え？」

撫子はしばらく、私の顔を見つめた。心なしか、視線が厳しいようにも思えた。

「えーと、嫌いって、それって、どういふこと？」

「…知らない」

言っと、撫子は本のページに目を落とした。

*

あなたは意外に思うかもしれないが、実は私は、ルネサンスの文化にはあまり興味が無い。ヘルメス主義にも、キリスト教的カバラにも、ほとんど関心がない。多少のことは知っている。けれどそれは、ル文研で活動するために身につけた、知識のがらくたにすぎない。

このような態度は、私だけのことではないらしい。

卒業エッセイを書いた、つまり黄金時代のル文研で一人前の部員として認められた卒業生は、九十三人いる。当時の一人前といえば、知識だけでなく、ルネサンス特有のひねくれたラテン語を読みこなす能力もあるということだ。

この九十三人のうち、歴史学者を目指すと卒業エッセイに書いたのは、三人。実際に歴史学者になった人は、ひとりもない。

*

日曜日、駅前に買い物に出たときのことだった。

「おや、川上さんじゃないの」と呼び止められて振り向くと、緋沙子だった。さらに、緋沙子の横に、撫子がいた。

近所に家のある撫子はともかく、緋沙子がこんなところにいるのは不思議だった。緋沙子の家はずっと遠い。このあたりはただの住宅街で、遊園地や催し物があるわけでもない。二人で待ち合わせてどこかに行くなら、こんなところには来ないはずだ。

「こんにちわ。変なところにいるのね。こんなところ、なにしに来たの？」

緋沙子は優越感もあらわににやりと笑って、

「そう？」

撫子とデートしていた、とでも言いたげな顔だった。

よく見れば、緋沙子のなりはよそゆき風だった。服やバッグは地味ながら高価そうで、ほどほどに流行に従っている。対して撫子のほうは、まるっきりの普段着だった。お出かけという意識なしに出てきたようだった。

私は推理した。緋沙子はこのあたりに用があつて来た。もしかすると親戚でもいるのかもしれない。撫子は、おつかいかなにかでここに来た。二人は偶然出くわした。

…という結論を出して、私は撫子に尋ねた、

「どこ行つてきたの？」

私が期待していたのは、『散歩』とか『そのスーパー』というような答だった。

「…秘密」

撫子は無表情に答えた。緋沙子をへこませるのに手を貸すつもりはないようだった。

「そう。じゃ、さようなら」

「じゃあねー」

「…さようなら、川上さん」

一瞬、なぜ『部長さん』ではなく『川上さん』なのかと考えて、思い出す。緋沙子がいるときにはそう呼ぶように頼んだのは私だ。

そういえば、どういうわけで二人が一緒にいたのか、私はいまだに知らない。

*

ゴールデンウィークの合間にある平日のことだった。

放課後、部室にゆくと、鍵は開いていた。そこまでは普段どおりだった。五時間目で授業の終わる撫子が、先に来ていいるからだ。

壊れかけて回らないドアノブ　鍵はかかるので支障はないを引く。部室には、いつものように窓際に撫子がいて、そのそばに、緋沙子がいた。

「こんにちわ。」

遠藤さん、今日は早いのね」

授業が終わる時間は私と同じなのだから、ちょっと先に来ていてもおかしくはない。それはわかっているけど、違和感を覚えた。

つまるところ私は、緋沙子が撫子と、ふたりきりだったのが気に食わなかった。ただ、そのときはそうとはわからなかった。恋は盲目という。これは相手を見るとときにかぎらず、自分自身を省みるときにもあてはまるらしい。

「いけなかった？」

「いいえ」

私はロッカーからノートパソコンを出して、打ち込み作業の準備をした。

緋沙子は『世界の歴史』をまた一冊片付けていた。先日と同じように口頭試問をして、次の巻を渡した。

そのまま帰るかと思いきや、緋沙子は撫子のそばに戻った。

「撫子って、TVとか見るの？」

首を左右に振って答える。

「雑誌とか読む？」

同じく、首を左右に。

「まんがは？」

同じく、首を左右に。

「友達とかと話題がなくて困らない？」

「…あんまり、しゃべらないから」

「しゃべんなかったら、友達となにしてるの」

「…ゲームしたり」

「ゲーム？ するんだ？ 最近どんなのやった？」

「…『Never7』と、『Canvas』」

二つとも私の知らないゲームだった。が、どうやら緋沙子は知っているようで、しかもかなり意外なものようだった。しばらく絶句してから、驚いた声で、

「…………一緒にゲームする友達って、女だよな」

撫子はこくりとうなずいた。

「私もそういう友達欲しいわ。…欲しいかな。ま、撫子ならオツケーってことで。」

ね、頭、触っていい？」

撫子はこくりとうなずいた。

緋沙子は、撫子の頭に手をやって、なでた。

「かわいい、かわいい」

私は無性に苛立った。

きわめて不愉快な事態が進行しつつある、という自覚がようやく生じた。『頭、触っていい？』と訊かれてうなずいた撫子が腹立たしかった。緋沙子が頭をなでることはかまわない、それを許した撫子が、腹立たしい。

撫子がやったというゲームを、私が知らず、緋沙子が知っているのも嫌だった。『Never7』も『Canvas』も、しばらく前に聞いて知っていたタイトルなのに、いまだに調べていなかった自分の間抜けさを悔やんだ。

このあいだの日曜日に、二人が一緒にいたことを思い出して、いまさらながら苛々した。どうしてあんなところで一緒にいたのか、どう考えても、わからなかった。この文章を書いている今でも、見当もつかない。

そしてなにより先週の、恵庭先輩が来たあとの、『でも部長さんは嫌い』。

「じゃーねー」

「…さよなら」

緋沙子は出てゆき、撫子は本のページに目を落とした。

「撫子、」

呼ぶと、ページから目を離し、私を見る。

『遠藤さんに体を触らせるの、やめてほしい』『Canvas
ってどういうゲーム？』『このあいだの日曜、どうして遠藤さんと一
緒にいたの？』『私のこと嫌いって、どういう意味？』言おうと
して。

盲目にはなっても、分別は残っていたらしい。

「……………ごめんなさい、なんでもない」

私は顔を真っ赤にしてつぶやいた。

撫子は小さく笑った。靴を履いて窓際を離れ、私のところまで来
て、

「…頭、触ってもいい？」

「いいよ？」

撫子は私の頭をなでた。

「…かわいい、かわいい」

「ありがとう」

さつきまでの苛立ちが、撫子の手に取り取られたような気がした。

「お返し、させて」

撫子はこくりとうなずいた。

くせつ毛をごく短く切った、細い、色素の薄い髪をなでる。

「かわいい、かわいい」

うつむいて、苦いものでもなめているように眉を寄せながら、撫
子の唇は笑っていた。

*

ル文研の部長はたいてい、ちょっとした食わせ者だ。私も例外で
はない。

ル文研の元部長が、こんな秘密めかしたところに重大めかした文

章を書き残すからには、きつと驚くべきことが書いてあるはず
と思っただろうか。だとしたら、あなたは私に一杯食わされたのだ。
この文章には、驚くべきことなど、ひとつもない。

本当に驚くべきことが、人間の脳髓から出てくる例は、ごく稀だ。
人間の考えることはみな似ている。秘教哲学的な思想は一見すると
華々しいが、慣れてしまえば、流行歌のようにどれもよく似て見え
る。

本当に嬉しいことは、特別な出来事ではなく、毎日のようにある
ことなのだと思う。それと同じように、本当に驚くべきことは、ど
こかに隠れているのではなく、目の前にあるのだと思う。たとえば、
死。

*

「おいらはドラマー やくざなドラマー

おいらが怒れば 嵐を呼ぶぜ

ケンカがわりに ドラムを叩きや

恋の憂さも 吹っ飛ばせ

作詞・井上梅次、作曲・大森盛太郎、編曲・河辺公一、『嵐を呼ぶ
男』。かなりの音痴でも歌える、他愛のない歌だ。恵庭先輩はそれを、
馬鹿馬鹿しいほど律儀に、譜面どおりに歌った。そうすると、この
他愛のない歌が、まるでビー玉のつまった宝石箱のように、愛すべ
きもののように聞こえてくる。

部室のドアが開き、

「こんにちわ、ヤマトの諸君」

「先輩！」

私を抱きしめる恵庭先輩の腕 幸せだった、としかいえない。

「しい、五日も見なかったら、ずいぶん大きくなったね。何セン
チ伸びた？」

「またそんなこと言って」

「三年って言ったら切ないじゃないの」

私は中学のあいだに恵庭先輩の背を追い抜いた。

「そうですね…」

感慨にひたる私を置いて、恵庭先輩は窓際の撫子に、

「ねえ、窓際のちっちゃいさん、このあいだ名前聞くの忘れてた。

教えてくれる？ 私は恵庭麻紀」

「…佐々木撫子」

「撫子？ 『でじこ』でいい？」

その瞬間、私は珍しいものを見た。撫子の怒った顔を。

「…いいえ」

「ごめんごめん、佐々木さん。なんだか、このあいだから謝ってばかりね」。

今日は、佐々木さんに会いたくて来たんだ。

ねえ、部活、楽しい？」

「…はい」

「歴史、好き？」

「…嫌いじゃありません」

どういうわけでか、撫子は敬語を使っていた。このあいだ恵庭先輩と話したときには使わなかったし、名前を尋ねられたときにも敬語ではなかった。『でじこ』がよほど頭に來たので、距離を置く言葉に切り替えたのかもしれない。

「んっんっんっ、『嫌いじゃありません』か。その表現、なにか含んでる？ もっと他に好きなものがあるとか」

「…お答えする必要があるんでしょうか」

「私ね、ロリコンなの。佐々木さんみたいなかわいい子のことは、なんでも知りたくなっちゃうのさ。」

しい、しいはでっかくても好きだよ」

私の腰に腕を回し、耳のそばで囁く。と、次の瞬間には突き放す。それが恵庭先輩のやりかただった。

「…私に用事というのは、なんでしよう」

「用事じゃなくて、会いたかっただけ。」

佐々木さんとは、泥沼のようなお付き合いをしたいと望んでいるのですよ。といっても最初は清いお付き合いから」

いつたい恵庭先輩がどういつつもりなのか、もしわかるものなら、いずれわかる。わからないものなら、あれこれ考えてもしかたない。恵庭先輩のやることなすことに、いちいち理由を詮索していたら身が持たない。

「…そうですか」

「そうです。そこんとこ、よろしく。

しい、私がいなくて寂しい？」

「はい」

私の答を聞いて、恵庭先輩は聖母のように 言いすぎは百も承

知だ 微笑んだ。

「もつと寂しがって頂戴。

またね。バツハハイ」

恵庭先輩は去っていった。

それから小一時間ほど、私はパソコンへの打ち込みをした。撫子は窓際で本を読んでいた。

万事快調、という気がしていた。今日は恵庭先輩に会えだし、これからも頻繁に来てくれそうなことを言っていた。撫子はこのまま次の部長になってくれそうだ。緋沙子は部長候補ではないけれど、邪魔なわけでもない。

長い目で見れば、私の楽観的な気分は、そう的外れでもなかった。けれど、目と鼻の先にある問題を見落としていたのは、褒められたことではないだろう。

物事を客観的に見る能力は、ごくごく限られた才能だと思う。あるときには鳥の視力で物事を眺める人が、別の状況では、モグラのように盲目になる。このときの私も、目の前の問題には、モグラのように盲目だった。

撫子の声はいつも、とても確かな存在感を放った。それでいて不思議に、これと挙げられるような特徴を欠く、とらえどころのない声だった。

その撫子の声が出た、

「…部長さん」

見ると、撫子は、使い捨ての剃刀を手にしていた。私のほうに差し出している。

時間が止まり、それから、動き出す。

「欲しい？」

こくりとうなずく。

私は剃刀を受け取り、膝を切るうたとすると、

「…待って」

「ん？」

「…ここがいい」

撫子は自分の手を指さした。左手の、親指の第二関節、手の甲の側だった。

「わかった。待ってて」

窓際に左手を置き、慎重に、ごく浅く切る。

このあいだよりも上手にやれた。かすかに赤い線が現れただけだ。撫子に見せて、

「もつと要る？」

尋ねると、撫子は首を左右に振った。

窓際を離れて、私の前にきた撫子に、傷のほうを向けて手を差し出す。が、撫子は、手をとろうとしなかった。ためらっている風だった。

「…要らない？」

手をひっこめかけると、

「…膝に座らせて」

言ったあと、撫子の頬は赤らんだ。

それで私は理解した。なぜ傷は、この場所でなければならなかったのか。私の膝に座ったとき、自然になめられる場所が、ここだ。

「いいよ」

小さな撫子の体を、膝の上に招きいれた。

撫子の舌が、ごく浅い傷を、ちろちろとなめる。

血色のいい肌から連想したとおり、撫子は体温が高かった。シャンプーの匂いも洗剤の匂いも、ほとんどしないのが不思議だった。

撫子は香料が苦手で、特別に気をつかっているのだと、あとで知った。

私は思わず 思わず、だろうか。はっきり覚えていない。とはいえ、意識するしないにかかわらず、私はそうしただろう。右腕で、撫子の体を、強く抱きしめた。

撫子は、傷から口を離した。

「…もっいいいの？」

こくりとうなずいた。

もうしばらく、このまま抱きしめていたかった。私の血が染み込んだ体を、もつと感じたかった。

私は数秒間、そのままできて、やっと諦めをつけ、撫子を離した。振り返って撫子は、

「…」

私を見つめ、なにか言いたげな風だったので、

「ん？」

「…やっぱり部長さんは嫌い」

撫子は窓際に戻り、本を読みはじめた。

*

ルネサンスの哲学は、人間を小宇宙とみなす考えに大きな比重を置いた。天動説から地動説への転換に、哲学的な意味が見出されるのは必然だった。

コペルニクスが円形の惑星軌道を考えたのは哲学的な理由からだったし、その他あらゆる面でルネサンスの哲学、つまり新プラトン主義や数秘術の影響を受けていた。ただしコペルニクス自身は、地動説の哲学的側面をあまり強調しなかった。かわりにブルーノがこれを大々的に行い、哲学的地動説をあちこちで説いて回った。さらにガリレオが、地動説を扱った著書でイエズス会を罵倒し、さらに教皇までも愚弄したために、伝説の異端審問が起きた。

ガリレオは、物理学者としては比類のない存在だったが、天文学者としては二流だった。当時すでにケプラーが発見していた楕円軌

道を無視し、コペルニクス同様、惑星軌道は円形だという考えにとられていた。科学的思考からの隔たりや、事実との不一致の程度において、円軌道の地動説は天動説となんら変わらない。ただ新しいというだけだ。

にもかかわらずガリレオの異端審問は、科学と宗教の対立という神話となり、ルネサンスの秘教哲学の残滓に「科学」「真実」のお墨付きを与えている。人間はまだ、ルネサンス的迷妄から自由ではない。

キリスト教的カバラには、このような名残は見当たらない。ルネサンスの思想状況の理解という、かなり間接的な形でしか、現在につながらない。

戦前に出されたル文研会報のどれかの編集後記に、印象的なくだりがある。あるとき文献を読んでいたら、発作的に疑念にとられた。もしかしてこれはみんな、誰かが暇つぶしに偽の文献を捏造したのではないか？

ルネサンスには偽書がはびこったことや、ル文研の蔵書は大半がプリントであることを思えば、この疑念を杞憂とばかりはいえない。しかも書いてあることといえば、自分の人生とはまったくなんの接点もない、この世でもっとも役に立たない世迷いごとだ。

*

ゴールデンウィークが開けた日だった。

放課後、私はいつものように、鍵のかかかっていない部室のドアを開けた。撫子が先に来ているからだ。

「こんにちわ」

部室の奥、窓際に、撫子と緋沙子がいた。

緋沙子が撫子のそばにいるのが不愉快だった。それを緋沙子に悟られないように表情を作り、と同時に、自分のしていることが途方もなく馬鹿げているとわかった。

撫子の唇のあいだに、緋沙子の左手の薬指があった。

緋沙子は私を見て、なにげなく左手をひっこめながら、

「いらっしやい。…あらやだ、怖い顔」

指を隠すように左手を握って、窓際のスペースに置いた。その薬指には、剃刀で切った傷があるはずだ。

私を見下ろす緋沙子の顔は、なにかを、もしかするとすべてを知っている顔だった。動揺している様子もなければ、虚勢も気取りもない。心なしか、少し悲しそうに見えた。

人の顔を平手打ちするのは難しい。自分より背の高い相手ならなおのことだ。人間の反応速度と、構えのない体勢からモーシヨンを起こすのでは、前者がはるかに優る。そのうえ、私はまだ知らなかったが、緋沙子の運動能力は並外れてよかった。

私の平手打ちは空を切った。指先だけがわずかにかすった。私は低く唸った、

「失せる泥棒猫」

思い返すなら滑稽のかぎりだ。いったい私の頭のどこに、こんな台詞がしまわれていたのか。

緋沙子は肩をすくめ、ちらりと撫子に目をやってから　　撫子を見るな、と言いたかった　　、出ていった。

「剃刀、貸して」

撫子の体に、緋沙子の血が混じったからといって、洗い落としたいとは思わなかった。緋沙子の血がどうでもよくなるまで、私の血を与えればいい。

激情にかられていても、理性は働いていた。跡が残っても目立たず、日常生活の支障にならないところはないかと、頭をひねった。

と、撫子は、私を抱きしめた。

嬉しかった。撫子がいる、ここに撫子がいる、というそのことが嬉しかった。大切なのは「ここに」ではなく、「いる」のほうだ。ひとりの人間が存在することは、ときとして、奇跡に等しい。

私は涙がこみあげるのに任せながら、

「いいから、剃刀　　」

言ったその唇に、撫子の唇が押し当てられた。二、三秒はわけがわからずにいて、それからやっと、撫子とキスしているのだとわか

った。

体温が高い撫子は、口のなかも熱かった。

唇を離して、撫子は尋ねる、

「…血の味、した？」

「味？」

こくりとうなずいた。

血の味がしない、つまり、緋沙子の血をなめてはいない、という意味だ。

撫子がなめる血の量はごくわずかなので、たとえなめていても、口のなかに味が残っているかどうかわからない。けれど、だからといって、撫子を疑うことはできなかった。このときの私は、白を黒と言われても信じていただろう。

「どうして？」

なぜ、緋沙子の指を口に含んでいたのか。

「…部長さんに見せたかった」

「わざと？」

こくりとうなずいた。

思い出してみると、私が現れたとき緋沙子は、左手を握って指先を隠した。あれは指先の傷を隠すためではなく、傷がないのを隠すためだった、と気づいた。

「どうして」

「…嫌いだから」

嫌い 『やっぱり部長さんは嫌い』

私を。

「全然わかんないよ」

撫子は困った顔をした。

いろは歌をつなげていったときの、心が通じたという感触が、もう一度欲しかった。それともあれは嘘で、心が通じたことなど一度もなかったのかもしれない

「太古 完全 砂漠に孤独」

J・A・シーザー作詞作曲、『バーチャルスター発生学』。歌っているのはもちろん、恵庭先輩だ。

瞬間、撫子の表情が揺らいだ。

それでやっと、わかった。表情からなにかを読み取ったのではなく、タイミングよく示唆があったおかげで、連想がつながった。

「 恵庭先輩? 」

撫子はこくりとうなずいた。

私と恵庭先輩の関係を見たら、撫子は腹を立てるだろう。

こんな簡単なことに私は、いまのいままで、気がつかなかった。

私はこういう見落としを頻繁にやらかす。岡目八目という諺もあるとおり、身近なことを適切に見通すのは難しい。

けれど、それを言ってもこの際なんの解決にもならない。問題は、撫子が赦してくれるかどうか、納得してくれるかどうかだ。

「 空気 原子 因果律屋 」

私にとって恵庭先輩は、自分の一部だった。それは、私の顔が私の一部なのと似ている。

恵庭先輩がなにをしても私は、その理由を知りたいとは思わなかった。自分の顔に向かって、なぜそんな顔なのかと理由を尋ねないのと同じだ。理由が必要だとしたら、「恵庭先輩はそういう人だから」で十分だった。

恵庭先輩は私にとって、そんなにも身近、それどころか自分自身だったので、恵庭先輩との関係を客観的に見ることを思いつかなかった。

…と説明したら、撫子を怒らせるだろうと考えて、言わなかった。けれど、まだ続きがある。

撫子と恵庭先輩と、どちらを取るかと言われれば、撫子だ。私は恵庭先輩になにも求めていない。恵庭先輩とはもう二度と会わなくても、この先どんな関係になっても、すべて受け入れられる。撫子には、求めている。少なくとも、私のそばにいたいことを。

…ますます撫子を怒らせるかもしれない。

「 そう 土地の子 受胎 」

考えあぐねているうちに、恵庭先輩の歌声はどんどん近づいてくる。

撫子は、ごく簡単に、私の悩みを解決した。

つま先立ちになり、私の頬をなめる。

「…おいしい」

なにが、と考えて、さつき涙を流したことを思い出した。

「哲学の胎児」

歌声はもうドアの前まで来ている。撫子は、恵庭先輩に見せるつもりだ。

無駄な試みだと思った。恵庭先輩はこんなことを気にする人ではない。撫子と抱きあつたままの私に愛情を示しさえするだろう。

ドアが音もなく開いて　ドアノブが壊れているので音がしない

、恵庭先輩は言った、

「おはこんばんちわ。…おや、三位一体のお誘い？」

恵庭先輩はこの手の、人を腰砕けにするくだらない機知が得意だった。

けれど撫子の腰はかなり頑丈だった。

「…もう坂上さんに触らないでください」

「しいは？　触らないでほしい？」

言ったそばから私の頬を、両の手のひらで包む。

「え…」

私が答えるのを待たず、撫子に向かって、

「ねーえ佐々木さん、遠藤さんなんて巻き込んだじゃ駄目じゃないの。

ダシにするなら私を使わなきゃ。泥沼のようなお付き合いがしたい、って言ったよね？」

「…部長さん」

撫子は私を厳しい目で睨んだ。早く恵庭先輩をはねつける、と目で言っていた。

「ここをハーレムにするのが、私の夢だったんだ。でも、みんな二号さんになるの嫌がつてさ。何人か脈があつただけど、逃げられちゃった。

佐々木さんは逃げないよね。一緒にこの子をいじろうよ。　し

いは、いじられるの好きでしょっ？」

「え…」

とまどう私を見て、撫子の目が氷のように冷たくなったかと思う

と、いきなり首を絞められた。あわてて恵庭先輩が割って入り、

「首絞めるのは禁止！ 絶対やっちゃ駄目！」

「あのー……」

三人してドアのほうを見る。緋沙子だった。

「撫子、こいつら終わってると思わない？ ほっとこつよ」

撫子の返答は、私に抱きつくことだった。

「はー。それじゃ、しょうがないか」

出てゆくかと思いきや、つかつかと歩み寄って、恵庭先輩に言った、

「ハーレムに入れてください」

「佐々木さんが逃げなきゃね」

「だつてさ。撫子、どうするの？」

撫子は私から離れなかった。

*

ル文研八十年の歴史をかたちづかった人々は、なぜキリスト教的カバラに情熱を傾けたのか。私はおそらく、その答を知っている。文献捏造の疑いにとらわれた、あの大先輩も、知っていたにちがいない。

捏造のほうはまだ救われるかもしれない、と思えることもある。キリスト教的カバラは、思想として失敗した。著者たちが全身全霊を費やして書いた文献は、彼らの信じたような真理の礎ではなく、歴史の重要な一幕でもなく、些細な世迷いごとになった。人間の信念がこれほど虚しいものだとはい、あまり思いたくない。

けれど私は、これを逆さにする。彼らの業績を称えるべき理由がなにひとつないこと、それは彼らの失敗の証ではなく、自由の証だ。彼らは自分の情熱を、誰のためにも役立たせず、ひとりで味わいつくした。文献のページごと、一行ごとに、輝かしい才能と情熱が、惜しげもなく濫用されている。それはまぎれもなく、命あるものが持つ途方もない力の証だ。ル文研の情熱は、この力への共感に発している。

生きていることの、目の眩むような傲慢さ。

この文章を最後まで読んで、時間を無駄にしたあなたにも、それは備わっている。

Explicit, Deo gratias.